

まちのうごき		
(2月1日現在)	(1月中)	
世帯数 14,707世帯	生れた人 90人	
人口 49,273人	亡くなった人 24人	
男 24,480人	転入した人 257人	
女 24,793人	転出した人 281人	

忘れないうで火の始末

“使う火を消すまで離すな目と心”

火災のおそろしさは、体験してはじめて分るといわれます。しかし、火災はわずかに十分で、みなさんの家を、財産を、そればかりか生命までも奪ってしまします。体験してからでは手おくれです。

昨年、市内で発生した火災は三件、昭和四十八年の十八件をピークに年々減少してきています。また損害額も二十一万五千円、一昨年に比べて大幅に減少しています。

しかし、今年になってからは早くも二件の火災が発生し、お年寄り一人が亡くなるという悲惨な事態が起っています。

多い“消防事故”

ちょっとした不注意から

ここで見おとしてならぬものに「消防事故」があります。

この消防事故とは、発見通報が早かったため、火災に至らなかった事故です。

過去五年間の市内の消防事故を調べてみると(別表参照)、昭和四十八年、四十九年の四十四件をピークに年々減少の傾向にありましたが、昨年は増加しています。

その原因をみると、特に「たばこ」「火遊び」「放火」が増えており、大きな火災となる要因がひそんでいます。また「風呂のからだし」は減少していますが消防署に通報されてこなかった件数も多くあるものと思われまします。

このように、わたしたち

別表 市内の消防事故発生件数(原因別)

事故原因	48年	49年	50年	51年	52年
風呂のからだし	15	10	8	13	5
たき火	5	11	9	5	6
たばこ	6	3	4	3	7
火遊び	6	6	4	2	6
天ぷら油	1	1	4	4	3
ガスコンロ		3	1	1	1
放火器具	2	2	1		2
可燃物の火	2	2	1		1
電気	2	1	1		2
花火	1		1		
不明	4	3		1	1
合計	44	44	35	30	34

のまわりには、表面に出ない消防事故がたくさん発生しています。その原因については、ちょっとした不注意によるものが多いということがわかります。

そのため、消防本部では「使う火を消すまで離すな目と心」を合言葉に、みなさんのご家庭に火の始末を強く呼びかけています。



市民一人ひとりが防火の習慣をつければ、このような火災は……

初期活動の三原則とは

火災の状況は、一つとして同じものはありません。出火場所・時間・原因などいくつかの条件の組み合わせで千変万化します。

初期活動の三原則は、早く知らせる、早く消火する、早く逃げるの三点です。しかし、そのときの状況で、どれが先という順位はつけられません。

△第一の行為 知らせる
火災を発見したら、居住者全員に知らせることがまず必要です。そしてすばやく「一九番」で消防署へ「どこ番地、目標をはっきり」と知らせる。

△第二の行為 消す
たとえば、石油ストーブをたおしたときは、落ちついてすばやく「消火器」を水バケツで初期消火を行います。しかし、天井に火が入ったら、消火器・水バケツの消火は困難です。

から早く避難しましょう。老人・子ども・病人はまず避難が第一です。特に二階にいて、煙を感じたらすく避難することです。ものに執着せずに逃げましょう。煙が周囲にたちこめてから人間が行動できるのは、せいぜい「二分」ぐらいに限度です。

家庭で防火のチェックを

また市消防本部では、一般家庭の防火に対する指導強化のため、さる二月八日から、一般家庭の防火訪問(防火しゅうたん作戦)を行っています。

これは、むこう一年間、市内の全家庭を消防署員が訪問し、市民の防火心の高

留守宅の火事

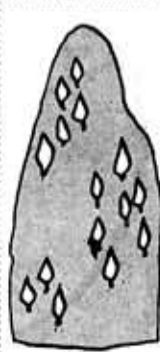
- ▷使ったアイロンは、その場で差し込みをぬく
- ▷ガスの火は消したか、元栓を閉める
- ▷家のまわりの燃えやすい物はかたづける
- ▷防火のための戸じまりを完全に
- ▷家を留守にするときは、となり近所にたのんでおく



子どもの火あそび

- ▷マッチやライターなどは、子どもの手にとどかないところへ置く
- ▷花火あそびの場には、おとなの人がつきあう
- ▷子どもの火あそびを見つけたら、みんなで注意する

- ▷「たばこ」の吸がらや「マッチ」のすりがらは、完全にふみ消す
- ▷「たき火」は完全に消し、さらに土をかぶせておく
- ▷風の強い日や、お天気続きの時は火を使うのに注意する
- ▷山での「火あそび」「花火あそび」はやめる
- ▷山すそでの「たき火」は山火事になる危険があるから注意する



いのおちとくらしを守るみんなの防火

